



A隊隊長として振り返る、地元くじゅう山系でのインターハイ

高橋 憲一

とうとうこの日がやってきた。8月2日、激戦の火蓋が切られた。

8月2日（金）早朝。行動役員宿舎であるドイツ村簡易宿泊所で朝を迎える。生徒らは前日から学校から徒歩圏内の「竹田茶寮」に前泊している。天気予報通り、晴れ。暑さが心配された竹田高校の体育館だったが、さほどでもなく安心する。開会式会場に続々と各都道府県の代表選手、監督が集結してくる。大会補助員である地元高校生、竹田市役所職員、教職員が慌ただしく動いている。

竹田高校山岳部男女8名の選手らにとっても「晴れ舞台」。全国大会の開会式が、日頃通う母校で開催されることに、まだ戸惑いを隠せない様子だ。

開会式を前にアトラクションが始まった。吉田神楽の皆さんによる「天の囀」。日向高千穂に天下った邇邇芸命(ニニギノミコト)は、太平を祈る猿田毘古神・布刀玉命・天児屋命をはじめ八百万神々を前に「ここは朝日かさし、夕日の照る大変良い土地である。立派な宮殿を造ることにしよう」と仰せになった。神々はこの仰せに従って注連縄(しめなわ)を張り、しっかりと宮柱を立てて宮殿を造ることに励んだ。ほどなく壮麗な宮殿が完成し、邇邇芸命(ニニギノミコト)は、ここに住むことになったという神話の舞。クライマックスはステージ前に設置された竹に攀じ登るシーンだ。これを演じたのが、竹田高校山岳部1年生部員の松田だった。最後まで面をとらなかつたため、気づかなかつた部員も多かつたが直前に知らされた高橋は、松田の力強い舞いが先輩に対するエールに感じられた。

入場行進の代わりに選手団が北海道から順に紹介される。大分県選手団は地元ということ

で最後に紹介された。「大分県男子代表、竹田高校、女子代表、竹田高校」というアナウンスにひととき大きな拍手が送られる。選手の表情が引き締まった瞬間だ。

開会式は挨拶等が終わり、選手宣誓へ。日小田と古嶋が登壇する。普段の会話でもかむことが多い2人。しかし、大会が近づくにつれ主将同士のコミュニケーションを十分にとってきた2人は立派に大役を果たしてくれた。宣誓の内容は、久住山コースを歩きながら一緒に考えたものだ。宣誓の中で古嶋が言う。「3つの登山コースの復旧に汗を流してくれた皆様、本当にありがとうございました。」昨年の九州北部豪雨以来、大雨が降るたびに荒れる登山道。修復のために一体どれだけの方が労力を注いだできたことか。このことを知る男女主将は、宣誓の中に大会が開催できることへの感謝の気持ちを盛り込んだ。開会式後、競技が開始された。場所を教室に移し、ペーパーテストが始まった。天気図作成は40分、他の3つのテストは20分で実施される。直前まで模擬問題の作成に取り組み、対策を練った。成果は出たのだろうか。そんな不安を胸に教室棟を見つめた。

試験内容	配点	男子得点	女子得点
気象	2点	1.7	1.4
救急	5点	4.7	4.7
自然観察	4点	3.9	3.9
天気図作成	5点	4.9	4.7

立川と古嶋の天気図は健闘したと言える。ペーパーテストは大会中に返却されるのだが、2点満点で1.9点を喜ぶ隊と、悔しがり落ち込む隊の差が結果に反映される。竹田高校の女子隊は明らかに前者。個人個人の目標設定のハードルが低いことが課題。もちろん、試験本番では全力を尽くしたに違いない。失点した0.1点が、勝敗を分けるという厳しい現実を知るのは、閉会式後に渡される成績表を見るときだ。大会後の反省文に「自分の甘さを知らされた」と2年生選手は書いた。ペーパーテストの出来不出来がその後続く3日間の登山行動に、弾みをつけることもあれば、影をおとすこともある。そして、結果が手元に戻るたびにいつまでも引きずらず次に切り替える能力も試される。登山競技は、登山そのものもそうだが、実に今後彼らが歩む人生と重なる。「人間力」が問われる競技なのだ。

場所を直入総合運動公園に移し、テント設営審査、炊事審査、装備審査が行われる。これが終われば初日の審査は終了。翌日からの登山行

動に向け、メンバー同士で健闘を誓い合う。

審査内容	配点	男子得点	女子得点
装備	10点	9.0	10.0
設営撤収	10点	10.0	9.5
炊事	5点	5.0	4.5

男子は、装備品のラジオの絶縁を失念していた。普段では考えられないイーラーミスだ。例年のように共に前泊し、最終点検に立ち会えなかったことが悔やまれる。ここで減点された1点が後々大きくのしかかる。減点幅が大きい項目での失点を埋めるのは、容易いことではない。

A隊が中岳コースに挑んだ8月3日

この日から、予報とは異なる天気にも翻弄され始めた。熱中症の心配がされるほどの快晴ではない。麓から眺める山頂付近はガスがかかっている。いつもの早朝の爽やかな空気ではなくやや湿気を帯びた空気が体にまとわりつく。

レゾナイトクラブくじゅう駐車場まで、貸切バスで移動する。朝3時半起床の選手たちは、慌ただしく準備をしたはずだ。やや疲労の色を浮かべる選手も見受けられる。大丈夫だろうか。行動が始まった。朽網別れまで一気に移動し、1本目の小休止。ここで複数の隊が簡易トイレの利用を申し出る。中には1隊で複数のトイレ利用希望があり、隊行動に間に合わない隊も出た。登山行動では快食、快便が必須だ。環境に自身をいかに適応させるかも、求められる力のひとつである。A隊最後尾を歩く私の前を、トイレ利用で一時的に班を離れた、島根県松江北高校の4名が歩く。

樹林間を行くが、やや蒸し暑い。汗が噴き出す。鍋割坂、鍋割峠、佐渡窪を経て鉾立峠に到着。ここで富山県富山高校の選手1名が体調不良になり、隊離脱が決定。支援隊のスタッフ、監督とともに下山が決定する。富山高校の選手に告げた。「今日一日、休養し、明日以降に備えなさい。山は逃げない。君たちのインターハイはまだ終わってはいない。」頷く富山高校の選手たち。1隊減ることは残念だが、行動は続行する。いよいよ最難関、白口岳直登の始まりだ。副隊長が「A隊、気合い入れて登るぞ！」と選手に檄を飛ばして出発。

審査員が傾斜のある登山道沿いに立ち、選手の体力を見極める。前の隊との距離は適切か、余裕を持って登っているか等を審査するのだ。審査員もよく見ている。結果は順当だと考える。

審査内容	配点	男子得点	女子得点
体力	30点	30.0	29.8
歩行	10点	9.8	9.3

女子は歩行技術がまだまだおぼつかないし、男子も歩行に関してはやや不安があった。減点競技なので、「竹田高校は体力がある」というような評判を勝ち得た段階で有利に立てる。今回団体男子の2位、3位は同点であったが、体力・歩行で勝る隊が2位となる。やはり「体力・歩行」は登山をする上で最も重要な項目なのだ。

白口岳の急登で埼玉浦和学院高校が、遅れ始める。隊列が長蛇の列と化す。先頭が次の休憩ポイントに到着し、最後尾が到着するまで1時間近い時間を要した。何はともあれ、難所は通過した。隊列を整え、稲星越、稲星山、中岳を経て池の小屋へ。埼玉の浦和学院高校が稲星山前で、とうとう動かなくなった。隊付きの医師が治療を施す。この隊も本体と合流するまで、隊長の前を歩く。何とか池の小屋に全パーティーが到着。30分の昼食タイム。

ここで、あざみ台より飛来したヘリが空撮を行った。ガスの切れ目をねらってヘリは何度も何度も隊に近づく。そのつど、大きく手を振る選手たち。ここでB隊（女子隊）がかなり予定より遅れているという連絡が入る。B隊唯一のメインザック行動による久住山コースが、早くも選手を苦しめているのだろうか。

池の小屋での昼食中も、竹田高校男子隊は取材を受けていた。A隊の旗手を務める竹田高校の2年生に偵察に行かせる。「元気だそうです」との報告に安心する。

隊は南登山道を下り、くじゅう花公園付近のゴールを目指す。200人近い選手が歩いた後の南登山道は見るも無残な姿になった。明らかにオーバーユースである。ただし、直前まで整備に入った多くの方々のおかげで、転倒が続出するようなこともなくゴールに辿り着いた。

冷えた飲み物、冷やしトマトで生き返った後、講話を拝聴。くじゅう山系のバイオトイレ管理の苦労話などを聞く。幕営地で同じようにトイレの清掃等にいそしむ補助員らの姿が、頭に浮かぶ。設営隊の中心として多くの補助員を束ねたのは竹田高校OBだった。仕事をさぼりがちな後輩を時にどなりつけ、大会成功のために汗を流してくれた。行動役員として、選手の安全登山を支えるスタッフにも、多くの竹田高校OBが名を連ねた。年齢の差を越え、OBという共通項で一度にまとまる一体感は、見ていて心地よかった。別府消防署に勤務する甲斐将人さ

んは「多くの竹田高校の先輩と知り合え、共に大会成功のために汗を流した経験は本当に貴重です。一気に人脈が広がる感じで最高に幸せです。」と語った。

最近、高校生が怒鳴られたりする機会がめっきり減った。そんな中で「やる気がないなら、とっとと帰れ！」と叱咤してくれる先輩の言葉は貴重だ。「竹田高校山岳部の補助員の中には手を抜く生徒も何人かいる。一方、自ら汚れ仕事を買って出る者もいる。」というOBの指摘。それを聞き、何をやらせても同じなのだと思った。学校生活で陰日向（かげひなた）がある生徒は大会補助員としても同じだ。残念だが、本人が気づくしかない。

久住山コースの下りはまるで田んぼ状態

8月4日（日）、A隊は久住山コースに挑む。山頂での冷涼な気候を楽しみに出発する。前日は、山中で簡易トイレの利用を希望する隊が多く行動に影響が出た。そこで幕営地、あるいは赤川登山口で、出来るだけ用を足してもらう方向でいった。支援隊員は、かさばるポップアップテントを背負って何かと大変なのだ。

1400m台地まで蒸し暑さが選手を襲う。久住山までの最後の登りを前に、班ごとに班長が掛け声をかけて出発。「麓は大雨、山頂は横なぐりの雨」との情報が無線を通じて入る。隊は雨具着用のために一時停止。雨具が蒸れて熱中症などにならないければいいがと、不安が頭をよぎる。杞憂だった。山頂はガスで覆われ、ホワイトアウト状態。冷涼な空気が覆っていた。

ここまでリタイアなし。昨日、途中で幕営地戻った富山高校も、脚が動かないと訴えていた浦和学院高校も元気に登っている。

無線で「B隊の支援のためにA隊の自衛隊員を派遣して欲しい」という旨の連絡が入る。中岳コースに、女子選手らがかなり苦戦しているらしい。

久住山山頂から、久住分かれ、扇ヶ鼻、鍋谷登山口へと移動する。前日、女子隊が歩いた下山道は黒土が削られ、まるで田んぼの畦作りのような状態に変わっていた。木の枝につかまりながら、慎重に下りるが、雨も手伝い、道は水分を含み、さらに滑りやすくなる。

それでも読図ポイントは置かれており、歩行技術も必要な中で、常に頭はクールにしておく必要がある。読図ポイントは3日間の合計で1

0か所置かれ、1ポイントにつき、0.4点ある。

審査内容	配点	男子得点	女子得点
読図	4.0点	3.2	3.6

地元開催の利を活かすのは「読図」だと考えて練習を積んできたが、男子0.8点、女子0.4点の失点は痛かった。今回は「初見でサムリーディングなしでわかる」という基準から逸脱した出題は1問程度だった。

さて、A隊選手はほうほうのていで下山。泥だらけだ。貸切バス8台の運転手が駐車場で待っていた。先行して、選手の状態を告げる。雨具をバスの下にザックと共に詰めること、座席にはビニールを敷いて座ること等を相談。雨に濡れると体臭がきつくなるが「我慢して下さい」と願います。この日、選手は体育館、監督は公民館に避難して寝ることが決定。監督のテントの幾つかが浸水した模様。

「チーム行動」のみで終了した最終日

早朝2時30分から大粒の雨が降り始めた。その雨音で起床する。雷鳴も聞こえる。ほどなく大会本部から連絡が入り、「大船山登頂は断念し、牧野道のみ『チーム行動』のみ実施する」という変更となった。行動開始が1時間延期された。恨めしい気持ちで空を仰ぐ。「大船山に登らせてやりたかったな」と呟く。

チーム行動は問題なく終了。体育館に戻り、解団式を行う。前日、長湯温泉での入浴ですっきりした表情の選手たち。解団式を前に、各班を率いた班長、副班長との別れを惜しむ会が催された。体育館のあちこちで、胴上げされる班長、副班長の姿。この間、本部と連絡を取り合い、時間設定や今後の行動を調整。審査員が返却物（テストの答案と模範解答など）を携えて登場。解団式を始めた。

コース隊長挨拶の中で語った。「雨にたたられた大会となってしまい残念。このA隊というパーティーも今日で解散。これから先、いろいろな山に出掛けたり、旅をしたりすることもあるだろう。就職や進学で家を離れることもあるだろう。まずは、自分たちが帰るべき場所である『ホーム』の人々に感謝してほしい。『帰るべき場所』があるからこそ頑張れる。『帰るべき場所』で待つ人々に感謝の気持ちを伝えてほしい。」横山秀夫氏の『クライマーズハイ』の内容に触れながら、そう話した。真摯な眼差しを

向けるA隊選手諸君を見て、最後は少し泣きそうになった。「ああ、これで終わりか。あっけないもんだなあ。もう少し一緒に登れたらいいのになあ。」と思う。

3日間の登山行動を支えてくれた、自衛隊の方々に選手を代表して、日小田主将がお礼を言う。敬礼で返す自衛隊員。宿泊予定の宿が、急な変更に対応できず、体育館周辺で貸切バス乗車を待つ選手たち。その時間を使って、約半数の学校の選手が、挨拶に来てくれた。

「隊長の話、いつも楽しみでした。今日は何を話してくれるかなって。」

「去年の大会より班の一体感があって楽しかったです。」

「また、みんなでいつかくじゅう山系に来ようって話しています。」

「離脱したときに『これで終わりじゃない』と言って頂き、前を向けました。」

ほんの数日前に出会った高校生が、笑顔で語ってくれる。また泣きそうになる。

それぞれの宿に向かう時間が訪れ、選手は貸切バスに乗車し、直入総合運動公園を後にする。

配車業務を終え、貸切バスを見送るために整列する。行動隊、設営隊のスタッフが笑顔で見送る。車窓に向かって大きく手を振る。全てのバスが去るまで大きく手を振る。心の中で「また絶対に来いよ。くじゅう山系の山々を仲間と登りに来いよ。」と心から思う。

残されたスタッフの表情には、まだ笑顔が残っている。充実した日々をかみ締めているのかもしれない。誰からともなく「お疲れさまでした！」という言葉が出て、そこらじゅうで握手する光景が繰り広げられた。

「自分から行きたい！って志願したんです。いやあ、来て良かった。ホント、いい大会でした。ありがとうございました。」福岡県から駆けつけてくれた教職員が言ってくれた。「選手、かわいいなあ！班長の仕事、またやりたい！」と言いながら笑う人も。

こんな競技、そうないよなと思う。選手のために役員が全力でサポートする。サポートする側は「大人」と呼ばれる人たちだ。竹田高校の選手が大会を振り返って書いて文に、次のような一節がある。

大会前のコース整備等で、多くの人の尽力があることは理解していたが、大会中にも様々な立場の人が、自分たちが気持ちよく競技できるように支援して下さるのを目の当たりにして、

感動した。家に帰ったら、両親、祖父母に大会の報告とこれまでのお礼を言うつもりだ。そして、次の挑戦である進路決定に向け、この経験を必ず活かす。

「中高年の遊び登山の大会ならこんなに一生懸命やらんよなあ。やっぱり、高校生のためやけん、一肌脱いでがんばるんやろうなあ。」と山岳連盟の方。皆さんのこうした気持ちは、選手にきっと伝わったことだろう。

閉会式、そして…。

8月6日（火）、閉会式。開会式と異なるのは、インターハイグッズを売る店や竹田の地元の商品を売るブースがあること。生徒補助員が一生懸命走り回る姿は開会式と同じだ。

閉会式が始まった。審査委員長による講評に続き、成績発表、表彰と続く。コース隊旗を次年度開催の神奈川県に手渡す。「いい大会にしてください。」と声をかけた。

閉会式会場には中岳コースで撮影した空撮の写真が飾られていた。200人近い選手がいたA隊だが、ヘリから見た映像ではくじゅう山系を歩くアリの様にも見えなくない。それだけ自然の方が雄大なんだなあと改めて思う。

登山計画書を交換し合う選手の姿、互いの健闘をたたえ合う姿にまた胸が熱くなる。竹田高校山岳部はさっそく化学教室でミーティング。

「A隊隊長：高橋憲一」というIDをぶら下げたまま、竹田高校の監督に戻った瞬間。選手を正視し、少しだけ大人になった彼らを誇らしく感じた。少し休みたい。A隊隊長などというひのき舞台を用意してくれた赤嶺登山隊長、合澤総務らは、事務処理や事後の片付けに直入公民館に戻った。特に、竹田高校に籍を置きながら大会の成功に尽力し続けた、合澤哲郎教諭の目立たぬ苦労と努力で、大会は無事に閉会を迎えることができたことは間違いない。感謝したいと思う。さて、新しい竹田高校山岳部の1ページが今日からまた始まる。先輩の姿を大会スタッフとしてそばで見ることができた1、2年生の心には先輩らの姿はどのように映ったのだろうか。ある1年生は反省用紙に綴っている。「自分もあの舞台に立ちたい！と、強く思いました。全国制覇も夢じゃないと思えたから。」

どうやら伝わっているらしい。最後に、大会に携わった全ての皆様、本当にありがとうございました！幸せな5日間でした。



竹田7年ぶり入賞

登山男子の竹田が地元大会で7年ぶりの入賞を決めた。優勝した下松工（山口）と1.5点差の96.7点で、総合6位だった。

地元開催のメリットを生かそうと、くじゅう山系に通った。30キロのザックを担ぎ、岡城跡や広瀬神社の坂を何度も往復し力を付けた。努力の結果は点数に反映。体力（30点）は満点で、歩行（10点）も全体で2位の9.8点と高得点だった。

だが“落とし穴”があった。初日、装備品であるラジオの電池の向きが正しくなく、1点減点。上位争いは僅差の勝負になるだけに、手痛いミスだった。日小 田直輝主将（3年）は「初日のミスでショックは大きかったが、引きずらずに成果を出せた。悔しい気持ちはあるが、入賞できてよかった」と話した。

「精いっぱいやった結果」

男子の大分工は38位。高山岬主将（3年）は「もう少し上の順位を狙ったが、精いっぱいやった結果。仲間の信頼感が高まったことがよかった」と納得の表情。女子の竹田は15位、上野丘は38位だった。竹田の古嶋天（そら）主将（同）は「結果は悔しいが、仲間が支えてくれたことに感謝したい」。上野丘の神崎彩吏主将（2年）は「県大会よりも、チームとして成長できた。力は出し切った」と大会を振り返った。

▽男子団体最終成績 （6）竹田96.7点（38）大分工86.4点

▽女子団体最終成績 （15）竹田94.3点（38）大分上野丘77.0点



上の新聞記事は閉会式後に取材された内容です。「地元の重圧 仲間のピンチ」という見出しですが、そうですね、地元からの応援はすごく力になりました。同時に「何とかして結果を出さねば！」と思ったことも事実です。仲間のピンチとは大会直前に高橋智史が体調不良となったことを指しています。今年は実に多くの取材があって、記事になった内容を読んで、「へえ、そんなこと考えてたんだ」と知ることも多かったです。いつも顔をあわせているのに不思議な経験でした。

高橋から引退する3年生へ

ほんの気持ちのプレゼント。閉会式夜に用意しました。ケースに入れて渡します。

